

トランスジェンダー生徒交流会にとりくんで

1、はじめに –性同一性障害をめぐる流れについて–

「性同一性障害（GID=Gender Identity Disorder、以下G I D）」という言葉が一般的になり、かれこれ10年になります。ここで、G I Dをとりまく過去10年ほどの歴史を簡単に振り返ることにします。

1995年 埼玉医科大学の倫理委員会に「性転換治療の臨床的研究」の倫理性を問う申請提出

1996年 埼玉医大倫理委員会の答申発表

「性同一性障害と呼ばれる疾患が存在し、性別違和に悩む人がいる限り、その悩みを軽減するために医学が手助けをすることは正当であり、外科的性転換も治療の一手段」とした。

1997年 日本精神神経学会「性同一性障害に関する特別委員会」が「性同一性障害に関する答申と提言」及び「性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン（以下、ガイドライン）」を発表。

第1段階 精神療法

第2段階 ホルモン療法

第3段階 乳房切除・性別適合手術（S R S）

・S R Sの実施については、各病院の倫理委員会で個別に承認する。

注：性別適合手術（S R S=Sexual Reassignment Surgery）はいわゆる「性転換手術」のことです。しかし、厳密には現在の医学では「性を転換」することはできません。そこで、望みの性別に適合した身体にするという意味で、「性別適合手術」を用います。

1998年 日本初の「公式の」S R Sが埼玉医科大学附属病院で行われた

1999年 3月に第1回「性同一性障害研究会（通称・G I D研究会）」開催。以降、年一回開催。

2001年 「3年B組金八先生」でG I Dがとりあげられる（～2002年）。

2002年 「ガイドライン第2版」が第4回G I D研究会で発表。

主な変更点

・ホルモン療法の開始年齢が20歳から18歳になった

・乳房切除が第2段階へ変更

・地域の開業医が医療チームをつくり、総合病院と一緒に倫理委員会をつくることを可能にした。

2003年 「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」成立（施行は2004年）。

第三条 家庭裁判所は、性同一性障害者であって次の各号のいずれにも該当するものについて、その者の請求により、性別の取扱いの変更の審判をすることができる。

①二十歳以上であること。

②現に婚姻をしていないこと。

③現に子がないこと。

④生殖腺（せん）がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること。

⑤その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。

2005年 「ガイドライン第3版」が発表。

主な変更点

- ・「段階」をやめ、「精神科領域の治療」「外科的治療」とした（アラカルト方式へ）
- ・SRSの実施については、「倫理委員会による個別承認」をやめ、医療従事者・学識経験者による「適応判定会議」で承認することにした。

2007年 G I D学会発足

しかし、1995年以前にも、当然、性別を越境して生きる人たち（トランスジェンダー）はいました。

詳しいことは専門家に譲りますが、おそらくは1995年以前は、現実の世界とトランスジェンダーの世界というのは、おそらく切り分けられたかたちで存在していたのではないかと推測できます。

ひとりの人間が切り分けられた状態を想定するならば、それは「パートタイム」という言い方になります。現実の社会では生得的な性別で生活をし、特定の時間を自分の望みの性で生活をするというふうな切り分けがそれです。あるいは、自分の望みの性別で常に生きつづける「フルタイム」という選択をした人もいました。

「フルタイム」の場合もふたつの切り分けられた状態があると、わたしは考えます。ひとつは、人生をふたつに切るわけの「ノンカム（カミングアウトしない）」という生き方です。すなわち、「かつての性別」を完全に隠して、あたかももともとから「今生きている性別」で育ってきたかのような生活をするという生き方です。もちろん、こうした生き方をする人々は、現在もたくさんおられます。

もうひとつは、生きる世界を切りわけの方法です。すなわち、現実の世界とは切り分けられたトランスジェンダーの世界、例えば「ニューハーフ」「Mr.レディ」あるいは「芸能人」という世界で生きるということです。

もちろん、こうした分類はそうとうに図式的なものですので、個々の人々がいずれかの生き方に属するわけではなく、実際にはさまざまな方法を使いながらそれぞれの生活をされてきたとは思います。

しかし、1996年に答申が発表されて以来、急激にトランスジェンダーの世界は医療化されていきます。そして、「性を越境する行為」＝「医療行為」＝「性同一性障害」という認識が広がっていきます。

これに輪をかけたのが、2003年に成立した「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（以下、「特例法）」です。この法律は、「性同一性障害」という病気を持った人が、その「障害」を「医療」を借りて克服し、そうした病者を法律で特例的に救済するというスタンスを持っています。従って、この法律によって認められる書類上の性別の変更も、社会の枠組みに影響を与えない人のみに特例的に認めるというスタンスになります。そのために、先にあげた5つの要件が必要となるのです。

わたしは、こうした流れはトランスジェンダーという個々の存在を、既存の性別観念の中に押し込めていく可能性があると考えています。

2、トランスジェンダーの子どもたちにも出会いの場をつくりたい

わたしは教員になって以来、たくさんの部落や在日の生徒たちと出会ってきました。振り返ってみると、いずれの生徒たちも、その変わり目には「出会い」があったように思います。そして、そうした彼らには、必ず「出会いの場」がありました。それは、例えばクラブ活動としての「社会科学研究部」であり、部落の生徒たちが集まる「全国高校奨学生集会」であり、在日の生徒たちが集まる「在日外国人生徒交流会」です。これらの活動は、「出会い」が生徒たちの変わり目になりうる力をもっていることをよく知るたくさんの教員達がつくりあげてきたものであると思います。そうした流れの中に、わたしもいあわせることができました。

そして、わたし自身、「玖伊屋」に集うトランスジェンダーの仲間や「セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク」に集う LGBTI (Lesbian Gay Bisexual Transgender Intersex) の仲間と出会うことで、自分を肯定する力を与えてもらいました。

ところで、わたしのところにたまに若年層トランスジェンダー本人や、その子を取り巻く大人達から相談が来ます。いずれの相談からも、どうすればいいのかひとりで思い悩み、誰に聞けばいいのかわからず、一縷の望みを持ってわたしにアクセスしてこられたことが伝わってきます。やがて、そうした子どもたちをつなげることはできないだろうかと考えはじめました。交流会をしたいと思ったもうひとつの理由は、若年層トランスジェンダーにとってのロールモデルの不在を感じていることでした。

「G I D」という存在は一般的になったはものの、そこで提示される姿は医療化されたモデルがほとんどです。それはマスコミの姿勢にも強く影響されていると思います。近年少し多様化してきたはものの、やはりG I Dを扱うのはドキュメンタリー番組であり、そこには解説者として医者が登場し、「普通の」男性／女性となった人が登場します。このような情報にしかアプローチできない若年層トランスジェンダーは、それこそが自分のめざす生き方であるような錯覚に陥り、ますます医療化されたG I D像に自分を近づけていこうとしてしまいます。しかし、現実のトランスジェンダーの姿は多様であり、その生き方も多様です。そうした「先輩たち」との出会いの場もつくりたかったのです。

しかし、いくらそう思っている、なかなか一步を踏み出すことができないまま数年が経過してしまいました。

3、はじめての開催

そんな状況から一步踏み出すきっかけがあったのは、2006年のことです。

この年、兵庫県播磨地域のある教育委員会が、小学2年生の子どもを望みの性別での通学を認めました。この報道をした新聞記者が、記事のために6月終わり頃にわたしの考えを聞きに来られました。3時間ほど話をした後、その記者は、「高校生のトランスジェンダーはどんなふう考えているんでしょうか？」と聞いてこられました。でも、そんなことは本人に聞かなければわかりません。そこで、わたしが知っている関西圏に住むトランスジェンダーの高校生や、トランスジェンダーの生徒が在籍する学校の教員に連絡をとり、集まる場をつくることにしました。

そして7月、5人のトランスジェンダーの高校生や専門学校生が京都・東九条に集まりました。当日の集まりについて、2006年8月10日付の神戸新聞に以下のような記事が出ています(注：この記者の性別記載は、持って生まれた性別に基づいています)。

古都に、梅雨の合間の強い日差しが照りつけていた。

7月22日。JR京都駅近くの集会所で、「トランスジェンダー（性同一性障害）生徒交流会」が開かれた。

集まったのは、スカート姿で日傘を差した男子や、だぶだぶのストリートファッションに身を包んだ女子ら計5人。高校や専門学校などに通う生徒だが、うち4人は登校拒否の経験があった。

「結婚は戸籍を変えたらできるけれど、好きな女にガキをつくってやられへん。できるようにならへんかな」

夢をテーマに話したとき、男子の心を持つ女子がこう言った。

別の女子が応じた。

「家族を持ちたい。遺伝子というか、自分の血がちょっとでも入った子どもができるようになってほしい」

切ない胸の内を互いに明かした。自然と笑みがこぼれた。

当日のことを、後に参加者みんなにメールでたずねました。

Q、はじめて「トランスジェンダー生徒交流会」に来た時感じたことは？

- ・一番はやっぱ緊張でした。すごく人見知りなのもあって。自分の意見がまだしっかりしていないのもあって、あまり話ができなくて残念でした。まわりの人の意見を聞いて、正直他のFTMの方が言ってることに同感できないことが多かったのは事実です。反面、MTFの方(その時は主にきょうこさん)の意見は、すごく感心させられることが多くて、すごく自分を見直すいいキッカケになりました。でも一概に『FTMの意見はすべて賛成できない』『MTFの意見はすべて賛成できる』ということではないです(>_<)。
- ・めちゃくちゃ緊張した分、あまりにも自由であっけにとられた、皆料理夢中やし、いつきさんはビール飲んでるし(笑)。初めて多くの同じ人に出会えてしかも話できてあんなときはホンマに新たな一歩を踏み出した気がした。話し聞いて理解してくれた時に嬉しくて必死で涙堪えてたりしたよ。恥ずかしい話しですが(笑)。
- ・最初は、来る人来る人すべてがトランスにみえました(笑)。同年代ぐらいの自分と同じ人と出会えて話をしたり聞いたりできて、なんか純粹にうれしかったです。あと、いろいろ考えさせられました。

(注：FTMは*female to male* =女性から男性へのトランスジェンダーをあらわします。それに対し、MTFは*male to female* =男性から女性へのトランスジェンダーをあらわします)

交流会の終わりに「こういう会をまたやったら、みんな来る？」とたずねると、「来る！」と即座に答えてくれました。「どれくらいの頻度でやろう」とたずねると、少し考えて「季節に一回かな」という答えが返って来ました。その答えの通り、いままでに5回、交流会を行ってきました。

4、現在のトランスジェンダー生徒交流会

現在、交流会には大阪・奈良・兵庫・京都の中学生・高校生・専門学校生が来ています。

交流会への参加のきっかけは、それぞれです。もともとわたしと直接の知りあいだった生徒もいます。また、その生徒の在籍している学校の教員から相談を受けて、その教員を通じて来てくれる生徒もいます。さらに、大阪の生徒の中には、府立人研や私学人研を通じて交流会の存在を知った教員に誘われた子もいます。また、トランスジェンダー同士のつながりの中で、生徒同士がたまたま知りあつて来る場合もあります。

交流会は、昼前にスタートします。集まってきたら、三々五々、昼ご飯をつくりはじめます。いままでにつくった料理は、「安あがりのお総菜」「水餃子」「チヂミ」「お好み焼き」「手打ちうどん」など、ジャンルは多種多様です。

1時間半ほど格闘すれば、だいたい食事は完成します。その後、昼食を食べながら近くの人と話をします。食事も一段落ついたところで、ようやく自己紹介をします。はじめての人はそれなりに。2回目以降の人は、近況報告も含めて少し長めに自己紹介をします。自己紹介の最後は、その日のゲストスピーカーの番です。ゲストスピーカーからは少しいねいな自己紹介をしていただきます。その自己紹介を受けて、生徒たちがそれぞれ質問や感想を話しあいます。もちろん話しあううちに、生徒たちも自分の話をはじめます。そこから話はどんどん広がっていきます。

ゲストスピーカーには、はじめのうちはトランスジェンダーにかかわる人たちを呼びました。第2回目～4回目のゲストスピーカーは、以下の通りです（1回目は、神戸新聞記者との話しあい）。

回数	ゲストスピーカー	テーマ
2回目	大学生のFTM	進路について（なぜ大学に行こうと思ったか）
3回目	パートナーと住むFTM	パートナーや子どものこと
4回目	公務員のFTM	進路について（就職してからの性別移行）

いずれの回も、多様なトランスジェンダーの姿を生徒たちの知ってほしいという意図からゲストスピーカーを選びました。特に、3回目・4回目は、わたしもメンバーの一員である「まんまるの会（関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会）」の人たちです。

2回目のゲストスピーカーには、年齢の近い先輩として、大学に通いながら将来の夢に向かって歩んでおられる姿を語っていただきました。

3回目のゲストスピーカーは、女性とその子どもと一緒に住むFTMの方です。記事の中にもあった「好きな女にガキをつくってやられへん」という生徒の言葉に対して、なんらかのヒントになるのではないかという気持ちでお願いをしました。当日は、ご自分のトランスのことや、仕事のこと、親へのカムアウトのこと、相手の親との関係、子どもとの関係など、さまざまなことを話されました。

4回目のゲストスピーカーは、現在地方公務員をしておられるFTMの方です。30代～40代のトランスジェンダーの中には、はじめは身体上・書類上の性別で就職し、その後望みの性

別に移行された方（在職トランス）もたくさんおられます。そんな人から直接話を聞くことも大切ではないかという気がしました。

5回目のゲストスピーカーは、当初パートタイムトランスジェンダーとして生活をしておられる MTF の方に来ていただく予定でした。しかし、当日突然仕事が入ったために急遽「ミックスルーツ関西（ミックスルーツとは、文化的・人種的・環境的にさまざまな背景・要素・特性を持つということ）」というグループの人に来ていただきました。この方は、日本・イギリス・スリランカンミックスで、そういう自分の子どもの頃から感じてきた思いを語っていただきました。はじめは「性別のことで国籍・民族のことはぜんぜん違う」という意見が出ていたのですが、だんだん「このあたりでつながるかな」といった意見が出はじめたことが印象的でした。

また、交流会を始めた当初は京都の東九条で行っていましたが、兵庫からの参加者のことを考え、現在は新大阪駅近くの日之出人権文化センターを会場としてお借りしています。お借りするにあたっていろいろお世話になっている日之出の青年の方々が、「ぜひともトランスジェンダーの高校生と会いたい」と言って、飛び入りで参加されることもあります。そういう時には自己紹介に加わっていただき、部落のことについて語っていただくこともあります。

このようにして続けてきた交流会のことについて、生徒たちは次のように感想を返してくれています。

Q、その後参加し続けて感じていることは？

- ・性同一性障害だけじゃなくて、いろいろな分野での差別やら常識やら普通とかが、勝手な観念で根づいてたりすることを知った。今までは教科書でしか知らんし、リアリティなかったことでも、実際当事者の声聞いて、自分（性同一性障害）のこと以外に少しは目を向けれるようになった。でもまだまだ自分のことで精一杯やったりするから、自分でちっぽけやなあって毎回痛感する。でもそれが逆に頑張ろうて気になれるから良い刺激になる。交流会はすげー世界の広がる所やと思う。てか広げられた（笑）！
- ・毎回交流会で出会った友達や新しく参加される方と会えるのも楽しみなんですけど、一番はゲストの方の話聞くのを楽しみにしてます。毎回自分にとってかなり得るものが大きいと感じています。

5、出会いをつなぐに、つながりを力に

当初、交流会は生徒たち同士の出会いの場としてスタートしました。そこに集う生徒たちが同じ世代の仲間たちと、そして、トランスジェンダーの先輩や、さまざまな人たちと出会うことによって、ロールモデルの幅を拡げていく場にしたいと考えていました。

また、4でも述べたように、生徒たちはトランスジェンダーの仲間や先輩と出会うだけではなく、さまざまな「マイノリティ性」を持つ人たちと出会い、自分のあり方や社会のあり方をさまざまな角度から考えることができるようになってきたように思います。

ところで最近、交流会にはもうひとつの「出会い」があることに気づきました。

交流会に生徒たちを連れてくるひとりひとりの教員は、それぞれの現場でさまざまな試行錯誤をしながら、交流会に参加してきた生徒たちと、日々の学校生活を送っています。そうした

教員同士が出会い、とりくみを語りあうことによって、悩みを解決する糸口をシェアすることができます。あるいは、わたしたち自身のネットワークが広がっていきます。そのことで、孤立しているトランスジェンダーの生徒のサポートも可能になっていきます。わたしたちが子どもたちをつなげるだけでなく、子どもたちがわたしたちをつなげてくれていることを実感します。

6、未来への一歩

トランスジェンダーの生徒たちの中には、将来展望はおろか、日々の生活にすら不具合を感じ、鬱的症状をあらわしたり引きこもり状態に陥ってしまう生徒もいます。また、自分のことが確定しないため、恋人をつくりたくてもつけれない（相手にされない）場合もあります。そうした中で、リストカットを繰り返す子もいます。

また、MTF と FTM で顕在化する人数に圧倒的に差があります。次にあげる作文は、ある FTM の生徒のものです。

今まで、この交流会以外にも色々参加したこともあったりで、色々な FTM の方と知り合ったのですが、常識があつて筋が通つた方を、未だに見たことがないのが正直なところですよ。そういう人も探せば必ずいると思いますが、MTF のに比べると少なすぎる気がします。

正直、FTM なんてホルモンさえすれば外見もどうにでもなるし、元が女性な訳やから小さい頃から周りからかけられる『責任』というものが、男性より限りなく少なく家族へのカムも MTF の方に比べれば、はるかに楽なケースが多いと思います。ズボンをはいたって今では、寧ろ普通です。

悩みの重さの感じ方は人それぞれ違うし、こっちの方がしんどいねんから我慢しろなんて思いません。でも僕は、交流会で MTF の方の苦しみとかを考えると、自分の GID としての少しのちっぽけな悩みを、言うなんて恥ずかしくて馬鹿馬鹿しくて言えません。というか、別にその程度のこと悩みと思つてないので言いません。

その中で聞いてると、交流会での FTM の方の言つてること、わかるけど、しょうもないと感じてしまうのが多いのが本当です。例えば、学校にスカートが嫌なら自分が動くしかなくて、それがどうしても無理なら我慢するしかない。仕方ないことは仕方ないことで、それでも耐えられないなら学校やめるしかない。ここでやめたかって、女の人って男の人より責められないですよ。責任追求されないんですよ。MTF の人はその責任をどれだけ追求されるか。その責任を追いながら、自分を出せるとゆうのはもう想像つかんぐらい辛くてすごいことと思うんです。

それに交流会終わった後などによく聞く絶対許せないこと。『自分が本当に男やったら、今頃子供だらけで大変なことになってるから、FTM でよかった！笑』に『女風呂は楽しいから FTM でよかった！笑』。裏では『悪いけど MTF 無理！笑』。なにより常識がない人が多すぎる。こんなこと言うて、なにが悩んでる？しんどい？人間馬鹿にするのもいい加減にしといてほしいと思つてます。子供ができないから責任持たなくていいからって上みたいなこと言うて、なにが男やねんって…。でも大体の FTM の人が上に大賛成してて腹立ちます。

なので変な話 FTM めっちゃ嫌いで、一緒にされたくもないです。でもこんなけ言つと

いて、自分がちゃんとできてるかと聞かれれば、胸張ってうんと言えません。

こないだ『男になりたいと言われるのが嫌』と言ったんですが、今は仕方ないと思えます。男性として生まれて、男性として責任をちゃんと果たしてきた人たちからしたら、中途半端に見えて当たり前です。

まだ今、なににたいしても全部一人で責任とれるかって聞かれたら無理です。それは世の中に自分のこと女って知ってる人がいる限り。逃げ道が絶対あると思うからです。やから、もう女って言われることに腹が立たなくなりました。いつか認めてもらえるように、一般の男の人より頑張らないと思います。

もちろん、この生徒の論の背景にあることはきちんと押さえていくべき内容ではあります。しかし、このような非対称性があるということもまた現実であるということです。現実には、いままで集まってきた生徒のうち、FTMは7人いるのに対し、MTFは2人しかいません。

今から4年前、山陰地方に住んでいたある MTF の生徒と話していた時、指先にふと目がいききました。「爪、きれいにしてるね」と言うと「とにかく、これだけはゆずれないんです」という答えが返ってきたことをおぼえています。おそらく自分が MTF である数少ない「証」としてのこだわりなんだろうなと思いました。

3回目の交流会の時、「未来」と名のる MTF の卒業生が、出身高校の教員に連れられて参加をしてくれました。未来は、長い間引きこもりの状態にありました。その間、何度もリストカットを繰り返したと、はじめての自己紹介の時にポツリポツリと語ってくれました。それからは、毎回必ず参加してくれます。「彼女」は、交流会に参加する気持ちを、次のように書いてくれました。

Q、はじめて「トランスジェンダー生徒交流会」に来た時感じたことは？

みんなコンプレックスを抱えているのに、それを感じさせないほど前を見て歩んでいることに驚きました。

Q、その後参加し続けて感じていることは？

みんなに会えることが楽しみになってきた。会うことで今までの苦を少しずつ癒されている気がします。

最後に、この未来が書いた「あなたにとっての交流会をひとことであらわすならば？」という質問への答を紹介して、このレポートを終わります。

Q、あなたにとっての交流会をひとことであらわすならば？

→未来への一歩